

# 思ひ草

第7号

平成24(2012)年2月29日 発行

## 『味のある子』を育てる指導者に

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



今年も箱根駅伝の応援で正月を迎えました。たすきをつなごうと、自分の持てる力を出し切って激走する姿に感動しました。沿道で応援する誰もが、どの選手にも声援を贈りました。彼らのひたむきな姿を見て、私も一教師として誓いました。他には無い「よさ」をもつ、「味のある」学生を育てたい、と。

「小学校4年生の息子がいます。周りの友達は中学校受験に向けて塾などに通い、勉強を始めていると聞いて焦ってしまいます。子どものためには、本人が乗り気で無くても塾などに通わせて、勉強をさせた方がよいのでしょうか？」

これは昨年10月、サッカー元日本代表北島豪氏との「子育てトーク」の際に寄せられた40歳代男性からの質問です。

塾通いを一概に否定はできません。しかし、それが親の無理強いという事であれば、徹底的に「勉強嫌い」になる恐れもあります。昔から、「馬を川に連れて行くことはできても、水を飲ますことはできない」という諺があります。

ここでは、親の心の構えが大切になります。その子育て論が、他者と一味違う「よさ」をもつ、「味のある子」づくりなのです。テストの高得点も、魅力の一つです。否定できません。しかし、人の魅力は、それだけではありません。数値では比べることの出来ない、その子の持つ「よさ」は多数あります。

他人や事物に対して優しい、人への助力を惜しまない、他人やその周囲を明るく楽しくする、縁の下の力持ちでがんばるなど、「よさ」として挙げられる魅力は多数あります。

他人との比較を気にしないで、マイペースで子育てに励んで欲しいと願います。他の家族の子どもと比べて、焦って塾通いするのではなく、わが子にとってどうすることが、味のある子どもにするかと考えて、結論を出して欲しいと願います。

将来教師をめざす学生たちも、子どもたちの心に寄り添いながら、彼らの「味のある子」への頑張りを応援するような「味のある教師」に成長して欲しい、と願いました。

## 自己と向き合う時間・空間

人間開発学部 教授 みやかわ やき 宮川 八岐



ある日の半蔵門線の電車内で、7人掛けのいすに座っている乗客全員が携帯電話若しくはスマートフォンを見ている光景がたまたま目に入った。「おっ、これは珍しい。」と思うと同時に「ついにここまで来たか」とも…。

しかし、このところ電車内ならずとも道端でも、レストランでも大学の授業の合間でもよく見かける。学生などは恐らく自宅でもそうなんだろうかと心配にさえなってしまう。

かつては“テレビっ子”が問題になった。科学技術が進歩し、便利な時代になることは有り難いことではある。しかし、一方で自分でものを考え、空想し、思いや願いを育て、強い意志を固めるなど心を鍛えたり、自らの言動を振り返ったりする自己と向き合う時間・空間を失ってはいけないように思う。

わが少年期は、登下校で心を鍛えた。片思いに悩み、友人や先生との会話を振り返っては問答し、夜寝床に入っては将来を夢見て不安とのたたかい、時には大人や社会の矛盾などと密かに対決したものである。

国立妙高青少年自然の家の施設を活用して総合講座を実施したが、日々の最後のプログラムは振り返りであった。活動への取り組みがどうであったか、役割の果たし方はどうだったか、どんな発見があったか、について振り返って気付き考えたことをまとめた。そんなプログラムであったから、仲間の意外なところを知り、まんざらでもない自分を発見したり、いかにだらしない人間だったかを思い知らされたりしたのである。その僅かな時間は貴重な自己と向き合う時間・空間だったはずである。

今、日々の生活の中にそのような時間・空間があるだろうか。携帯電話などは必需品になっている。しかし、それがなかったら結構会話が弾んだに違いない、あるいは自己と向き合う時間・空間になったに違いないと思われる場面をよく見かける。

一日のうちに僅かの時間でも自己と向き合う時間・空間をつくらうかと熟々そう思う今日この頃である。

## 教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。今年度から始まった教育実習の様子についても紹介します。

### 教育実習

#### 学校現場での実習から多くのことを学びました

#### 「教育実習生の研究授業」を参観して学んだこと

人間開発学部 副学部長 一 正孝

教育実習では、「声が小さい」、「妙に偉そう」、「黒板の字が汚い」、「わかりきったことでいちいち当てる」等、実習生に対しての児童生徒や最近の一部保護者からの声は辛辣なものがあります。過去において多くの実習生が汗と涙の現場体験をしてきたことでしょう。約40年前に教育実習を経験し、現在教育機関に籍がある者として、教育実習生の研究授業を参観する立場を経験できたことは、大変不思議で有意義なことでした。

学校現場において教育実習は大きな負担でしょう。実習前後の段取り、実習生がいなくなった後の授業の立て直し、児童生徒に対してのフォロー。それでも実習生を受け入れるのは「先生になりたい」という実習生の熱意に答えてあげようとする気持ちからであり、将来の同僚・後継者の姿がそこに浮かぶからでしょう。

学校現場においては、「生きる力」の育成をさらに進化させることを目指しています。その中で「コミュニケーション能力」が一つのキーワードとして考えられます。話をすることが苦手な実習生は、「言葉の5C」(①Clarity：明晰さ ②Color：新鮮さ・特色 ③Concreteness：具体性 ④Correctness：正確さ ⑤Conciseness：簡潔性)を学び、実践することにより、受け取る側の子どもに響く言葉となるでしょう。さらにまた、人間としての五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)を総動員させて、「賢く」「暗黙知・身体知・経験知や以心伝心等」原初的かつ高等な身体表現によるノンバーバルコミュニケーション力を磨くことによって、児童生徒との間に、より質の高い関係が築かれるでしょう。

教育実習を経験した者は、同僚や後輩などとも是非情報交換をしていただきたいものです。経験を分かち合うことで、コミュニケーション能力も高められることでしょう。

研究授業において、コミュニケーション能力の課題を提起した実習生がいたら参考にさせていただきたいと思います。これらのことは同時に私自身の継続的な課題でもあります。

#### 教育実習－教師のライフサイクルの一步として

人間開発部 教授 成田 信子

人間開発学部としての初めての教育実習。訪問指導に出かけ、実習が学生を大きく育てることを実感すると同時に、大学で学ぶことを問い直す時間をもらいました。

静岡県の四カ所の実習先では、体育、音楽、国語、そして理科の授業を見せていただきました。どの学生の顔も必死で、子どもに寄り添おうとしています。跳び箱では、体育館にいくつもの跳び箱コーナー。挑戦する段数やわざを自分で決め、教師はその子にあった支援をしようとしていました。器楽では、グループの演奏練習。教師は聴いてまわったあとにグループを選んで、練習成果を皆の前で発表する機会をつくっていました。説明文の「手で食べる、はしで食べる」。子ども自身が日常の食事を想起するような問いを投げかけていました。最後は、太陽のかけを測定するグループの簡易実験装置。自分たちで外に出て実際に見てきた結果をもとに話し合いをしていました。

実習の四週間は、「子どもたちが学ぶには自分はなにをしたらよいか」を徹底的に考える時間だったと思います。それは「待ったなし」の真剣勝負です。大学で学ぶことは、自分のために自分がすればよいことですから、学びの質がちがうといえます。学生が教師としてのライフサイクルの一步目を踏み出したことを感じました。ライフサイクルとは、職業をも含めたその人の一生の歩みを言います。しかし踏み込んで考えてみると、教師のライフサイクルは一步目の1から始まるのではなく、<sup>ゼロ</sup>0段階から積み上げていくものです。つまり、大学で学ぶ<sup>ゼロ</sup>0段階がライフサイクルを準備し、支えるのです。さて、<sup>ゼロ</sup>0になにを求めますか。三年生は実習から戻り、卒業論文に取り組みます。わたしたちの仕事は大きな<sup>ゼロ</sup>0を模索することかと思っています。



## 教育実習

## 学校現場での実習から多くのことを学びました

## 「教育実習から」

初等教育学科 3年 鈴木 葵

教育実習で私は大きな経験をしました。それは授業をするということです。大学での模擬授業を経験していない私は一体自分はなるのだろうか、と思いました。いきなり2週目から授業が始まりました。初めて教壇に立った時、緊張と焦りで頭の中が真っ白になりました。45分はあっという間に過ぎ、先生方にたくさん指導を頂きました。もちろん授業は失敗だらけです。その失敗を自己課題とし、次の授業で解決できるように取り組みました。私はよく、書き順や目線をあげて話すこと、子どもに明確な指示を出すよう指導されました。

毎日授業や指導案に追われ辛いこともありましたが、その中で私を支えてくれたのは、子どもたちでした。どんなに疲れている朝も子どもたちの「先生おはよう」の声で今日も一日頑張ろう、と自然に気持ちが引きしまりました。授業中も子どもたちに助けられ子どもから学ぶこともたくさんありました。最終日、子どもたちと別れるとき、手作りのくす玉をもらいました。ヒモを引くと、そこには「1ヶ月ありがとうございました。」と書いてありました。辛いことや苦しいこともたくさんあったけれど、やはり私は教師になりたい、と強く思いました。そのため、教師になるために今しか出来ないことを1日1日大切にして取り組みたいと思いました。

## 教育インターンシップ

## 1年間の活動が、次につながるように！

## 「後輩へのメッセージ」

初等教育学科 2年 河辺 裕太

まずインターンシップに行こうか行かないか迷っている学生さんに伝えたいことがあります。それはインターンシップでの現場の活動は自分自身を成長させることのできる最高の体験現場だということです。始めるきっかけは「周りのみんながやるから」や「単位になるから」「先生に勧められたから」などといった理由でも構いません。理由が何であろうと学校現場に行って活動することが大切だと感じているからです。この文集を手にとって最初から最後まできっちり読んでくれる学生はほんのわずかだと思います。でも、それでも構いません。今までの『思ひ草』に書かれている多くの先輩方の体験談がインターンシップがどれほど素晴らしいものなのかを物語っているということを感じ取ってくれるだろうと思っています。

自分は谷本小学校でお世話になっています。小学生との現場での交流を通して感じたことは学年が一つ違うだけなのに児童の精神面が大きく成長していることでした。それを痛感したのは運動会の練習でした。学年によってサポートする内容が違って来るのを肌で感じました。1年生は隊形移動の誘導、2年生は列の整頓指導、3年生以上になるとしっかりと自分たちが理解しているのほとんどサポートの必要はありませんでした。小学生にとっての1年間は大きな意味のあるものでありそれを理解すべきであると感じました。もう一つは45分授業の短さです。指導案を作成する時に時間配分は大切だと思います。自分が思ってい

るよりも45分は早く来るので、それを肌で感じてください。さらに先生方の授業展開を生で受けられるので指導案作成の手助けにも繋がる経験だと思います。小学生は純粋で可愛いですし、先生方もみな優しく接してくれます。現在通っている横浜市立谷本小学校は自分の第二の母校のように感じています。この活動が教育実習に生かせるようにさらに学んでいきたいと思っています。

## ★活動記録から

教育インターンシップの活動を通して、指導に関わる支援や場の設定など、学ぶことができました。

活動内容	気づいたこと・考えたこと(ふり返り)
<p>[1年生女子 / 3組と1・2組]</p> <p>• 器械体操 / マット運動 (3時間中の2時間目)</p> <p>→ 次回、発表をする。限られた時間でもしっかり練習する。</p> <p>① 各組で柔軟とストレッチ</p> <p>※ マットは直に痛めやすいので、特に首を念入りにほぐしておく。</p> <p>② 班ごとにまとまって練習。</p> <p>前転 → 開脚前転 → 後転の連続練習がスムーズに行える。</p> <p>③ 三点倒立、壁倒立、倒立前転、倒立後転を練習。</p> <p>※ 周りに人がいない事を確認し、安全を確認してから練習する。マットは必ず一方通行、後転に人がいない事を確認する。</p> <p>「安全面の確保」を重視する。</p>	<p>前転の補助に気づいた。脚を上げて、人がいないことを確認してから行。</p> <p>壁倒立の補助に気づいた。壁を足の支点にして、肩がくっつき、頭を倒す。壁に当たって滑らないように、後転に転ぶときは、手をしっかりつかむ。</p> <p>[三点倒立のコツ] 頭と手を三角形を信じて、バランスが取りやすい。</p> <p>[倒立前転のコツ] 倒立 → 腕 → 首 → 肩 → 足、ついでに曲げてい。足はしっかりと曲げられ、腰をキックしてしまいがちな原因に注意。</p> <p>[その他補助] 開脚前転や後転の際、練習に入ります。</p> <p>※ 前転の際にマットを引くことで、前転の際に足が滑らないように補助する。</p>

健康体育学科3年  
河野佑璃菜さんの  
活動記録です。

## 第2回教育インターンシップ連絡協議会開催



12月16日(木)、講堂にて、第2回教育インターンシップ連絡協議会を開催しました。今回は、受入校の先生方と学生が共に参加して意見交換する会とし、学生の報告会も兼ねる形で行いました。

23年度の実施状況報告、担当者の先生のお話(東市ヶ尾小学校 宮本幸代先生と元石川小学校 宮良京子先生から、各校での学生の活動のようすを報告していただきました。また、学生の代表として健康体育学科からは2年の三宅一輝さん、3年河野佑璃菜さん、3年戸村大希さん、初



等教育学科からは、2年守屋しずかさんと2年米谷元さんから活動報告がありました。

学生からの報告では、戸惑った状況のたくさんあった実習開始時の様子、子どもたちとの関わりや先生方のご指導を通して成長させていただいた様子など、一人ひとりの思いのこもった言葉を聞くことができました。実習校の先生方からは、学生が頑張っている様子の報告やこれから期待することなど、教職を目指す学生にとって温かい励ましの言葉をいただきました。

## 未 来 塾

### 「人間開発は人づくり」をモットーに！

教育実践総合センター学生支援領域事業としてスタートした「未来(みらい)塾」です。今年度も以下の講座が開講されました。開講講座は8講座、述べ受講者数は67名(2～3月開講分除く)でした。

講 座 名	担 当	開講回数と受講者数
「健康体育を考える」 & 「中・高、学習指導要領解説 [保健体育] を読む」 講座	木村 一彦 教 授	10回開講、述べ受講者数10名
体育授業、体育的、集団宿泊的行事としてのスキー研修講座	木村 一彦 教 授 原 英喜 教 授	長野県山内町一ノ瀬にて2泊3日で開講、受講者数1名
昇段級審査対応・美しい形武道の修得と錬成(日本剣道形、木刀による基本技稽古法、制定杖道形) 講座	植原 吉朗 教 授	6回開講、述べ受講者数12名
柔道基礎力養成講座	上口 孝文 教 授	6回開講、述べ受講者数8名
「体育・スポーツ関係雑誌読書会」 講座	一 正 孝 教 授	12回開講、述べ受講者数18名
「保育を語り保育を学ぶ」 講座	野本 茂夫 准教授	3回開講、受講予定者20名程度
教採対策「教育学書に親しむ研究会」 講座	田沼 茂紀 教 授	6回開講、述べ受講者数8名
音楽コース ピアノ講座	高山 真琴 准教授	6回開講、述べ受講者数10名